

日経MJ 2016年 6月29日付

英のEU離脱「始まりのはじめ」

英国のEUからの離脱が国民投票で決まった。世界の市場が大きく揺れている。筆者は投票結果が報じられたその日に、ドイツで開かれた政府関係の経済会議に参加していたので、欧米の専門家がこの出来事についてのどのような反応を示すのか、間近で観察する機会を持つことになった。

一言で言えば、今回の投票の結果は「始まりのはじめ」ということになる。英国の離脱という大きな号砲が鳴らされたが、この後、英国で、欧州で、そして世界各地で、様々な調整が行われ、それが世界経済に大きな影響を及ぼすことになる。その長いプロセスを予想することは難しい。ただ、その影響の特徴を一言で表せば、世界経済は「不確実性の時代」に入ってしまった。



伊藤元重の

エコノオッチ

というのが適切だろう。

たとえば、離脱が英国経済にどのような影響があるのかと言え、英国経済が大きく落ち込むという非常に悲観的なシナリオから、今後の様々な調整によってなんとか現状に近い状態を維持するという楽観的なシナリオまで、大きな幅のどのどこに収まるのかが分からない。だから不確実性の時代に入ったのだ。

英国が欧州から離脱すること、これまで当たり前のことであったことがそうでなくなる。英国の農民は欧州の農業保護政策から外れるし、ロンドンが欧州の金融センターの機能をどこまで維持できるのかも分からない。英国経済は世界でもっとも海外からの直接投資を受け入れている国だが、自動車業界から金融ま

世界経済地殻変動のマグマ

で、英国に進出している企業が今後その機能の一部を欧州の他の地域に移していく可能性は否定できない。そうした動きが広がらないように英国は努力しなくてはならない。

国民投票で決着をつけようとしたことは、結果的に英国の世論の分裂をおおる結果になった。英国の離脱派の勝利は、欧州や米国での「離脱派」を刺激する結果になる。英国で起きた世論の二極化が、世界の他の地域に広がっていくことを懸念する。結果的に、多くの国が内向きになっていけば、それは世界全体にとって深刻な結果を生むことにもなりかねない。「始まりのはじめ」という表現を使ったのは、英国離脱の動きの底流にそった世界的な動きのマグマが存在し、それが今後いろいろな所で表面に出てくる可能性が大きいからだ。

英国離脱の動きは、とりあえずは世界同時株安、円高という形で、日本経済を直撃した。FTのマーチン・ウォルフ氏の言葉を借りれば、「英国にとって戦後最悪の出来事」が、世界市場を揺さぶったのである。

世界経済が脆弱な状況の中で起きた今度の出来事の影響は、まだしばらく、日本の市場を揺さぶるだろう。警戒を続けなくてはならない。

ただ、より警戒すべきは、ゆっくりと経済全体に広がる第2、第3の波である。株式や為替市場の動きほど派手ではないかもしれないが、本当に警戒すべきはこれから何年にもかけて起きる世界経済の大きな地殻変動である。その不確実性と規模を認識しているからこそ、市場の動揺も大きかったのだ。
(学習院大学国際社会科学部教授)